

現場研修でベテラン教師が学んだこと

—— 小学校23年経験教師の国語授業めぐって ——

栞原 昭徳

Study of Teaching Art and Technique in School Study and Training
—— Around A Japanese Language Lesson by 23 Years Career Teacher ——

KUWAHARA Akinori
(Received July 20, 2006)

キーワード：授業公開、研修、ベテラン教師

1. 6年2クラスの授業参観のきっかけ

2006年7月6日（木曜）、筆者は北九州地域のA小学校6年の2クラスの国語授業を参観する機会を得た。6年1組は経験3年目の男性教師が担任するクラスで、6年2組は経験23年目のベテラン女性教師が担任するクラスである。

本論に登場するベテランの女性教師（Y先生）は、国立大学教育学部出身で、附属小学校や教育研究所に所属した経歴も持っている。現在に至るまでも積極的に後輩教師の指導に当たってきている。熱心で、周囲から信望の厚いベテラン教師である。この4月の人事異動においても、A小学校の6年担任として着任することを囑望されたという経過もある。

そのベテラン女性教師が、あくまでも自分の授業実践力を高める機会を自分自身が求めるという形で、このたびの研修のチャンスを設定したのであった。もう一つ、この研修会の背景には、経験3年目の教師が担任するクラスの方が5年の時点からすでに荒れる要素を抱えており、6年生になってからの平素の授業を進めていく上でも困難をきたしている。そこで、この機会に若手教師にも授業公開のチャンスを与えて、学級の抱える問題解決の糸口を見つきたいというベテラン教師ならではの配慮があったと思われる。

このたびの国語授業をめぐる授業の公開と協議を通して、若手教師には今後の実践を継続しながらも改善を加えていく上で大いに参考になったと思われるが、本論で焦点を当てるのは、このたびの「ベテラン教師の研修体験」である。それは、ベテラン教師自身のこれまでの教育観（ないしは指導観）を根底からくつがえすような、いわば「改心」ともいふべき変化を明らかにすることになる。

教育実践への熱い思いを持ち続けてきたベテラン教師ならではの研修体験を明らかにするY先生自身の手による文章も寄せられている。このたびの授業公開を通して、ベテラン教師ならではの、教職への新たな思いと決意が再生していく過程を見ていただきたい。

事前の調整により、当日の日程は、次のように計画されていた。

2006年7月6日（木曜）

栞原、13時を目指してA小学校到着し、校長室へ挨拶。

できれば6年生の2クラスの給食、掃除の様子を参観する。

5校時、6年1組、国語授業「学級討論会をしよう」の参観。

6校時、6年2組、国語授業「短歌・俳句の世界」の参観。

15時30分～16時30分、協議会（校長室で）。

夕刻も、Y先生宅で協議。

2. 6年2組の子どもの様子

校長先生への挨拶のあと、さっそくY先生の学級の教室に入る。

給食を食べたあとのようで、子どもたちもくつろいでいる様子。人なつっこい感じの女児たち3人が話しかけてくる。ほかの子どもも、気持ちよく迎えてくれている感じを抱くことになる。

しばらくして、担任の先生と給食の係と思われる子どもたちが教室に帰ってきた。

そして、教室にいる子どもたちへ「給食の片づけが終わりました」と報告した。

この言葉と動きを見聞きして、私は学級活動の一環としての給食を大切にしておられるのだなと感心した。Y先生らしい丁寧な実践の一端と受け取った。

じつは、給食指導は、学級経営の鍵を握る活動である。荒れる学級、騒がしい学級では、多くの場合、給食に関する指導が抜けていることがある。

このあとは休憩である。

13時55分からは、掃除が始まった。掃除のとりかかり方や掃除中の子どもたちの動きを見ていて、教室の掃除の仕方が上手であることに気づいた。筆者も、机と椅子を運ぶのを手伝うことにする。

○机と椅子を運ぶ作業がきびきびとしている。

○雑巾を洗う、絞るなどの掃除の基本的な生活技術が身に付いている。

○床を拭くときに、両膝をつけて、片手で雑巾を使い、反対の手は床についている。

○雑巾で拭くときに、床に拭き残しの部分がない。

○教室の出入り口の戸を動かして、戸の溝や、教室の隅まで拭いている。

○机と椅子の移動の仕方がスムーズで、騒音をたてていない。

○無駄な話し声がほとんど無い。

掃除中の子どもたちの動きの中に真面目さや秩序があり、仕事ができる子どもたちであることがわかる。6時限目のY先生の授業が終了したあとの、栞原の「10分間のミニ授業」では、最初に、この掃除の仕方について取り上げることになる。

3. Y先生「俳句授業」指導案と主な学習活動

学期末の忙しい時間の最中、Y先生から、あらかじめ指導案が届けられた。栞原の研究室に、FAX送信されてきた指導案は次のとおりであった。

第6学年2組 国語科学習指導案（略案）

教諭 Y ・ N

単元 短歌・俳句の世界

1 目標

- 短歌・俳句に親しみ、言葉の使い方やリズムに関心をもって音読したり、鑑賞したりしようとしている（国語への関心・意欲・態度）。
- 短歌・俳句の優れた表現を味わいながら、短歌・俳句の世界のおもしろさ、美しさを感じ取ることができる（読む能力）。
- 短歌や俳句を音読しながら、文語の調子に親しむことができる（知識・理解・技能）

2 主眼

「閑かさや 岩にしみ入る 蟬の声（松尾 芭蕉）」を「山寺や 石にしみつく 蟬の声」と比較して読むことによって、使う言葉の違いによって思い浮かぶ情景などに違いが生まれるという俳句のおもしろさを感じ取らせる。

3 展開

主な学習活動	主な教師の言葉かけ
<p>1 「閑かさや 岩にしみ入る 蟬の声（松尾芭蕉）」「山寺や 石にしみつく 蟬の声」「さびしさや 岩にしみこむ 蟬の声」の3つの句について、読み比べる。</p> <p>① 3句を音読する。</p> <p>② 作られた順番を考える。</p> <p>2 「しずかさやいわにしみいるせみのこえ」を読み取る。</p> <p>① 漢字で書き表す。</p> <p>② 蟬の種類を考える。</p> <p>③ 句を読んで想像したことを絵や文でかいて紹介する。</p> <p>④ 音読をする。</p>	<p>○ この3句は、どれも松尾芭蕉が作った句です。この3句を読んでみましょう。</p> <p>○ 芭蕉は、どのような順番でこの句を作ったのでしょうか。3句の中で、どの句が好きですか。ワークシートに書きましょう。</p> <p>○ 読んでみましょう。</p> <p>○ 漢字で書き表しましょう。季語、季節も書きましょう。ワークシートに書いてください。</p> <p>○ この蟬の種類は何でしょう。</p> <p>○ この句を読んで、情景や作者の心を想像し、絵や文でかいてみましょう。</p> <p>○ 想像したことが表われるように読んでみましょう。</p>

14時55分、Y先生の授業は、日直のリードにより、規律正しく始めることができた。もし改善点を、あえて指摘するとしたら、初めの挨拶をリードする日直の声が小さいことであろうか。

主要な学習活動は、芭蕉の「閑かさや 岩にしみ入る 蟬の声」の句と、それが出来上がるまでの二つの句を音読しながら、

- ・作られた順番や漢字で書き表わしたり、
- ・同じ言葉に着目して、句の違いを考え合ったり、
- ・蟬の種類を考えたり、情景を絵であらしたり、など、

子どもたちの学習が活動的になるようにと、たくさんの工夫が凝らされている。

たとえば、三つの句を、敢えて平仮名書きで書き並べてみると、同じ文字や言葉と、同じような表現の中での小さな相違点が浮かび上がってくる。

①さびしさや いわにしみこむ せみのこえ

②やまでらや いしにしみつく せみのこえ

③しずかさや いわにしみいる せみのこえ

「せみのこえ」は3句とも、まったく同じである。3つの句の始めの部分の「さびしさや」「やまでらや」「しずかさや」の「や」は、これもまったく同じである。「しみこむ」「しみつく」「しみいる」の「しみ」も共通であるから、そのあとの「こむ」「つく」「いる」の意味が、この3句の違いをはっきりとさせるときの鍵を握ってるのかもしれない。

6年生の子どもたちの国語上の興味や関心を掻き立てずにはおかない教材の仕組み方であり、解釈である。

子どもたちの発表の声が小さいということをのぞけば、芭蕉の「しずけさや」の俳句の世界から逸脱することもなく、子どもたちの精一杯の学習活動が展開されているという意味においても、1学期末の授業としては十分である。そう思いながら、私もY先生の授業を参観させていただいたことであった。

Y先生からは、授業の前に、Y先生の授業が終了したあとで栗原から子どもたちへメッセージ（意見や評価の言葉）をお願いしたいということであった。

Y先生の授業が、やや授業時間をオーバーして終わったものであるから、私自身としては、授業後に私が子どもたちに感想を述べる機会は無いものと思っていたのであった。

けれども、Y先生は、授業後に、栗原が子どもたちに対して話す時間をとられたのであった。

4. Y先生指導後の栗原の10分間ミニ授業

もし担任のY先生から要請があるならと、授業を参観しながら準備しておいたメモがある。以下に示す4つの囲みの中の事柄である。

また、囲みの下の文章は、筆者が子どもたちに語りかけた言葉をそのままの形で収録したものである。私が教壇に立ってから終わるまでの時間は10分間足らずで、時ならぬミニ授業となった。

① 「いちばん良い姿勢をしてごらん」

そしたらね、こちらを向いて。君、大丈夫か？（よそ見をしていた子どもを注意。）

そしたら、ちょっとお話ししましょう。

うしろで見ていてね、姿勢が崩れている人が何人かいます。私は、けっこういろんな学校の6年生を見ます。それと比べるとね、いくつかががんばったら良いことがあります。

言った方がよいですか、言わない方がよいですか。（子どもたちに問いかける。じつは、すでに子どもたちの応答の声を期待する発問である。）どちらでも良いです、私は。

（子どもたちの中から「言ってもらった方がいい」の音が聞こえる）。

言ってもらった方がいい？ それなら、言いましょう。

まず、いちばん良い姿勢、自分が思う、いちばん良い姿勢をしてごらん。

いまから（すぐに）してごらん。

いちばん良い姿勢というのはね、まず、椅子のうしろの板に背中がぴたっとあたって、お尻が深く椅子の板の上に乗っている。いま、君がやったようにね。

座り方一つにも、その人の実力が出るのです。

一番よい座り方を教えますので、やってみてくださいね。

あんまり（椅子を）前に出しすぎて、こんなにお腹をへこませないといけないという座り方は、いけません。げんこつが1個入るぐらいです。さあ、やってごらん。

K、個別に指導する。「もうちょっと」「いい」などと言いながら。

これが、第1です。

こうするとね、書く字も、書く姿勢も、鉛筆の握り方も良くなります。

いま鉛筆の持ち方を見ましたら、みなさんの中には、あんまり良い字は書けないぞ、速い計算の仕方はできないぞというような持ち方があります。鉛筆の持ち方も実力のうちです。

②掃除の仕方のうまさ。雑巾の絞り方、拭き方が、とくに上手。

君たちは、本当は実力のある人が多いと思いました。

それは、私が早く来て、みなさんの掃除を見ていたでしょう。私が掃除をずうっと見ていて、掃除を手伝ったのを知っていますか。

じつは、教室の掃除を、私は手伝ったのです。掃除というのは、「仕事」なのです。この掃除がうまくできる人というのは、だいたい仕事ができる人なのです。一人、いちばん感心した人がいます。それはね、雑巾を固くしぼって、けっして床に水がつかないように拭き方をしていた人がいるのです。わたしが、掃除の終わりごろに、あのあたりで、隅っこも拭いてごらんと言ったときに、隅っこを拭いた人は、どの人でしたか？ 手を上げてごらん。君でしたね。

お名前は？ アイマ君？ みんな拍手をしてあげてください。

（子どもたち、Y先生も拍手）

そういう人がいるということが素晴らしいのです。きちんと、すみっこ、端っこをていねいにやりました。

私も少し教えました、教えられてすぐにできるということが立派なのです。

掃除も、「実力のうち」です。

③一斉音読の指導

そしてね、もう一つ（ほかの学校の6年生と比べると）負けていることがあります。音読ですね。声が小さいということです。

わかった？ それ、練習しましょう。

5分でうまくなります。今、（君たちが）やる気なら3分でうまくなります。今から私が教えますから。

やりましょうか？ やりますまいか？（これも、子どもたちへの問いかけ）

（子どもたちの中から「やりましょう」の声が聞こえる。）

それなら、いい姿勢をしてごらん。

今から、注意をするかもしれませんよ。はい、こちらを向いて。

君、よそを向いている。構えが大事なんです。

先生が、こうやったら（黒板に書いてある文字を指さしたら）、やる気になる！

栗原「しずかさや」と大きな声で、はっきりと範読する。

子どもたち、栗原のあとで「しずかさや」と一斉に声をそろえて音読する。つぎの「いわにしみいる」も、「せみのこえ」も、同様に大きな声で発音する。

君、口が開いていない。いい？ 読んでごらん。きみ、一人で。

（大きな声ではないが、真剣な表情で、「しずかさや いわにしみいる せみのこえ」と音読できる。）

まだまだ、それじゃあいけません。

（栗原が、精一杯の範読をくりかえす。）

みんながこれぐらいの大きな声を出したら、さっきのような（小さな）声ではないはずですよ。

いいですか、まず、大きな声を出しましょう。さんはい。（全員で、音読する。）

今ね、もうちょっとリズムがありません。

しずかさや、いわにしみいる、せみのこえ。速く読んでも、ぱっとここを（間を）開けるぐらいがいいですよ。

もう1回やりますよ。さんはい。

（子どもたち、ややリズムカルに、音読する。）

まだ、シャープさがないね。シャープさというのは、鋭さです。それがないね。ぼんやりしているんです。

しゃんとした声を出しなさい。さんはい。（子どもたち、音読する。かなり良くなる。）

はい、この列の1番うしろの人、女の子。きみ、本気で声を出していますか？

本気というのは、そんな顔ではありません。わかった？

わかりましたか？（応答なし）

K「はい、（という返事をする場面）でしよう？」、わかりましたか。

K、私、本気で言っているんですよ。読んでごらんなさい。

（女兒、弱々しい声で読む。）

それが本気の声ですか？

はい、もう1回みんなで練習します。そのあと、すぐに当てますから、やるんですよ、みんなで、さんはい。

(子どもたち、声を合わせて読む。)

はい(と、指名する。)

まだいけません、もっと本気でやりなさい。(声を出すことに慣れていない様子)

なんでも本気でやるんです。わかった？ みなさんも、同じです。

もう1回やって、最後。終わりにします。

(全員が音読する。) 80点ですね。95点を、もう一回、行きましょう。

全員音読。(声の大きさといい、そろい方といい、かなりの進歩)

それを学年の初めから終わりまで、本気やるのです。すると、きちいんと覚えられます。

今の君たちの頭脳ならね、3回読んだら、すべて覚えられます。

そんな覚悟で。これまであんまり勉強したことないでしょう？

それは、そんな(始めのような小さな声の)読み方だったからです。

読み方も本気でやれば、全部覚えられます。

④同じ言葉に気付く

ついでにやります。「蝉の声」が三つとも同じだといった人は、だれでしたか？

よく気がつきました。確かにそうです。「せみのこえ」は、すべて同じです。

ほかに同じ言葉ないですか、三つとも全部。

「しみこむ」「しみつく」「しみいる」。「しみ」というのが、全部同じね。

そのほか、ない？

(子どもたちの中から「ない」の声。)

いや、まだあるよ。「『や』がある」、「『や』がある」。

いわ(岩) やいし(石)の『い』もありますね。そのあとの『に』もありますね。

その気になったら、いくらもありますね。

さて、宿題というのは、先生から出してもらったことがあるかね。

宿題は、やれる人だけやってください。

「しみいる」「しみつく」「しみこむ」のように、3つの「しみ」「しみ」「しみ」ですが、自分は「しみいる」「しみつく」「しみこむ」の三つのうち、どれが好きか。

それを考えて、そのわけを書けたら、書いてきてください。

これが6年生の勉強です。

はい、終わりました。

日直「国語の勉強を終わります。姿勢を正してください」

栗原「はい、そうそう、いいですよ」

子どもたち・栗原、お互いに「ありがとうございました」

Y先生「はい、帰りの用意をしましょう」

以上の栗原の、時ならぬ「ミニ授業」は約10分間であった。

5. 校長室での協議から

2つの授業が終了して、それぞれの学級での帰りの会のあと、校長室で協議会を開くことになった。出席者は、この日の授業者の若手のK先生、ベテランのY先生、校長先生、Y先生の夫君（ビデオ撮影等、記録担当）、そして栗原の計5名であった。

Y先生の司会進行で、16時25分からは6年1組担任のK先生の授業「学級討論会をしよう」をめぐる、その後16時50分からは6年2組担任のY先生の授業「短歌・俳句の世界」をめぐる協議することになる。

司会役のY先生の言葉にあった「栗原先生からは国語に関することと、学級経営に関することをふくめてご助言、ご指導をいただけたらと思いますので」の言葉どおり、私の方は、国語授業づくりの側面と学級づくりの両側面にわたって発言することになる。

（若手のK先生の授業についても協議されたが、本論では省略する。）

a. Y先生の自評

今日の教材は、国語のベテランのK先生（北九州わかる授業研究会会員）のお勧めの教材で、指導案づくりの過程においても、ご指導もいただきました。

学級の実態なのですが、前にも（研究会で）発表しましたように、子どもたちは、私が担任として出会ったときには、うんもすんも言わない壁のような表情で、口もまったく開かない人たちでした。うなずきもしないという人たちで、国語の応答する授業は、ちょっと難しいなあという状況でした。

それに比べると、今日は、本当に栗原先生に来ていただいて良かったと私、思いました。先週まで、ものすごく忙しくて、栗原先生に来ていただくのに、十分に準備ができないという状況だったのですが、やっぱり無理をしてでも来ていただいて良かったと思えました。

そう思ったのには、いくつかの原因はあるのですが、一つは、子どもたちがすごく張り切りました。もう、少し前から栗原先生のお話は聞いていて、あの無表情で、感情を表さない子どもたちなのですが、親はちらちらと子どもから聞いていて、「大学の偉い先生が来られるので、張り切っている」というのを何人かの親から聞きました。だんまりしている子どもたちが、黙っていても喜んでいてですね。

そして、今日、栗原先生がお見えになってきたときに、子どもたちははしゃいで、なんか明るい笑顔が出ていたので、私はびっくりしました。

今日、掃除とか、給食をちゃんとしないと、栗原先生はそういう学習規律をきちっとされているから、だめだよということを言ったら、あの子たちは普段になく頑張っていました。

今日の国語の授業に関してもなのですが、いちばん心配だったのは、やっぱり子どもたちがものを言うかというところがいちばん心配だったのです。ふだんでも言わないような状態なので、

あれだけ言えたらもう90%は目的を達成したと思うくらいに、子どもが張り切って発表しました。やっぱり栗原先生に見ていただくという気持ち、またK先生からご伝授いただいた指導案で授業をしたので、いろいろな活動の要素が入って、子どもが動いたり言ったりできる、いろんな活動場面がある教材ですね。この教材も良かったのだと思うのです。

けど、担任として見たときには、ほんとに良く頑張った、ぐっと頑張ったと思います。子どもも、なにか「やった」いう顔をしていました。それが、すごくうれしかったです。

もう一つうれしかったのは、私の授業が終わったあとで、最後に栗原先生に（授業に）入っていただいて、子どもたちに、声の出し方だとか、やっていただいたときに、私も言っているんですが、私が言っている言葉よりも、栗原先生は1回お会いしただけなのに、栗原先生が「声を出して、本気で出して、言ってみて」とか言われる栗原先生の気迫というか信念というか、そういうものが子どもに伝わって、栗原先生にしていいただいたら、子どもたちの声が、かなり出ました。あの出ない人たちが。

だから、子どもたちは「やれば、出来るのだ」と、私も思いました。そういった意味では、子どもの可能性といったものを目の当たりにすることができたので、すごくうれしかったです。2学期も、私も、ああいう感じで真剣に取り組むという、こっちの姿勢を打ち出して、声を出してくれれば、聞いたり書いたり、もう子どもたちは、わりと出来ているので、あとはもう声を出して発表する、表現することができると、わりといいところへいくかなと思うので、ちょっと頑張らせてみようと思いました。すごく今日はいうれしく、良かったなあと思いました。

あと、教材の解釈とか、やり方というのは、教材研究不足で、K先生のおっしゃるとおりにやって、最後にイメージを広げる絵を描くところを入れたというところぐらいです。ニイニイゼミとか蟬の種類から「しみいる」を出すというのは、昆虫博士のK先生らしい発想で、私らしくないと思ったのですが、子どもが知っていたので、そこには食らいついていったかなあと思います。

だけど、最後に栗原先生がおっしゃった岩に「しみいる」「しみつく」「しみこむ」という言葉に着目して、やっぱり「しみいる」だというのを理解させるのは、すごく大事なあというのを思いましたので、そういう流し方を、栗原先生からお聞きしたいなあと思いました。今日は、本当に勉強になって、すごくうれしい1時間でした。ありがとうございました。

じゃあ、栗原先生。

b. 協議

栗原 私が、この学校に早目に来て、掃除を一緒にしたのは、意味があるのです。

掃除というのは、仕事なのです。この掃除のときに、だいたい身体が動くような学級であれば、ほとんど荒れているというようなことは言えないですね。

とくに、教室掃除の5人ばかりの子どもたちは、よく身体が動きます。私自身も掃除をしましたが、そんなに違和感はない。きっと日ごろから、本気でやっているからでしょうね。私が「隅っこを拭いて」というと、すぐに出来るのです。私の授業のときに手をあげた男児ですね。ほんとうに丁寧な仕事ぶりでした。やっぱり掃除のやり方というか、原則というかね、仕事の原則を知っているんですよ。そして、真面目にやっている。だいたいああいう感じで仕事ができたら、勉強も似たようなものですから、きちんとできるはずなんですね。ああいう子どもが一人でもいて、私の目に留まりましたから、初対面でしたが、ちょっと安心しました。

最初の音読を聞いたときに、ちょっと心配になりました。ちょっと声が小さいですね。この声が小さいのは、じつは（教師が日ごろの指導の中で）声を大きくさせていないと思ったほうが、早く実践に結びつくのです。6年生ですから、1年生に入学以降の様々な学年では、いろいろなことがあったであろうけど、6年を担任した4月から、まだ大きな声にする指導をしていないと思ったほうが良いのです。

そのコツはね、授業中に大きな声を出していない子どもというのは、教師から見れば、一目で分かるということです。きょう私が、あえて指名した女児は、じつをいうと授業中ほとんど声を出していないですね。だから、私が「みんなで言って」といっても、口だけは動いているのだけれども、ほんものの勉強にはなっていない。

あの女児に厳しく言ったのが、良かったのかどうかはわかりません。私から見れば、（今日はチャンスとばかり、指名をしたのですが）耐えられる子どもだったのでしょうか。（Y先生「今日は最後に、「〇〇さん、今日は、すごく声が出ていたよ」というと、ものすごくうれしそうに笑って帰っていきました。）」

授業の中で声を出していないということは、声を出さない練習を毎時間の授業でしているということになるのです。だから、全員に声を出させて、今日だったら「閑かさや岩にしみ入る蝉の声」の句は、もう覚えることにして、3分間ぐらい各自で練習する時間をとって、何人かに言わせてみるというのがいいでしょうね。

いちばん最後の推敲を済ませた作品を覚えさせたあと、ここに行くまでに二つの習作があったのだといって紹介しても良いのです。最後の秀句をきちんと覚えていると、比較が楽に出来るのではないのでしょうか。

そして、同じ言葉を見つけるというのは、いちばん見つけやすいし、うまいやり方なのです。だから、それを、さらに徹底するといいいのです。

「しずかさや」の「や」は俳句独特の「切れ字」という名前まで付いている。

話は飛びますが、家庭学習で「や」のついている俳句を、みんなで集めてくる。そして、「や」の果たす役割を、自分たちなりに考えてみるというのも、発展学習としては、おもしろいのではないのでしょうか。

また、「しみこむ」「しみつく」「しみいる」などの「しみ」も全部同じです。もう一個「いわ」と「いし」と言うときの「い」も厳密には、三つとも同じです。「しずかさ」や「さみしさ」は気持ちで、「やまでら」は物の名前である。だから「しずかさ」と「さみしさ」の二つは似ているともいえます。いろいろと比較すると、あの三つの俳句だけで授業はできるのです。

授業の仕組み方は、とっても素晴らしかったと思います。

子どもたちも、よく乗ってきたと思います。

Y先生 思ったのですが、栗原先生とお会いする前まで私は、国語というのは、文の読み取りとか、読み方とか、書くというくらいの感じで、なにか、生き活きとした活動の少ない、静的な教科と思っていたのです。でも、栗原先生に教えていただいて、ノート一つにしても、半分に切って貼れるようにとか、日付を書いてきちんと書くとか、栗原先生がよくされるように黒板の前に出て何かを書かせたり、作業的なことをされるのを見て、こういうような国語での活動が、なにか私の頭から飛んでいたような気がします。K先生も、栗原先生と同じなのですが。子どもたちは「今日は楽しかった」と言って帰っていった子

どもがたくさんいて、こんなことはあまりなかったのです。国語というのは、読んだり書いたりすることは大事なのだが、やっぱり仕事というか、動きを入れてあげることで子どもは楽しく取り組めるのだなあと思いました。

栗原 ノートにきちんと板書を視写することだって、先生がきちんと上手に評価したら、立派な、いい仕事になるんですね。

あのようなやり方だったら、子どもでも退屈しないで、出来るんだなあと思いました。

今日の二つのクラスの授業を見て、私はあまり心配を感じなかったですね。あとは丁寧な仕事をつくっていったら、やれるのではないかと思いました。きっと6年の4月に比べれば、良くなった段階ではないかと思うのです。

5. 6年2組の子どもたちへ栗原からの手紙

翌日の7月14日早朝、九州北部から研究室に帰ってきた筆者は、授業を参観した6年の2つのクラスの子ども宛に、さっそく手紙を書いて、FAXで送信した。

外部の参観者ができるお礼の形であり、子どもたちへの指針ともなり、教育実践にいそしむ教師への応援だとも考えているからである。2組宛てのものを下に収録する。

A小学校6年2組、
Y学級のみなさんへ

昨日、みなさんの国語の授業を見せていただいた山口大学教育学部の栗原です。
みなさんの授業を見ての感想や意見を書きます。

最初に、おどろいたのは、教室のそうじ当番の人たちの掃除ぶりでした。

そうじのチャイムが鳴ると、すぐに机を移動し、ほうきではいて、ぞうきんがけがはじまりました。みんなのまじめな仕事ぶりに、私も手伝いたくなりました。

そうじへの取りかかりや手順も素晴らしかったのですが、もっと私が感心したのは、ぞうきんを使つての「ふきそうじ」でした。ぞうきんを固くしぼって、ひざをついて、ていねいに床をふいている様子は、とても立派でした。戸を開けて教室のすみっこをふいたり、戸のみぞまできれいに拭いたのには、感心しました。

芭蕉の俳句の勉強が、とても熱心にできていましたね。

Y先生が、三つの俳句を並べてくださったので、簡単に比べることができました。

三つの俳句に共通する言葉に、もう一度下線を引いてみました。

- ①さびしさや いわにしみこむ せみのこえ
- ②やまでらや いしにしみつ せみのこえ
- ③しずかさや いわにしみいる せみのこえ

どうですか。上のように、きちんとたてと横をそろえて書いてみると、それまで気付かなかったことがわかってくるでしょう。

最初の共通の言葉の「や」というのは、「古池や かわず (かえる) とびこむ 水の音」のように、俳句に独特の言葉です。それも、見えてきますね。ちゃんと名前も

付いていますよ。ぜひ、調べてみてください。

「さびしさ」と「しずかさ」は様子をしめす言葉ですが、「やまでら」は物の名前です。「いわ」の方が良いのか、「いし」の方が良いのか。これも、見えてくる問題です。

そして、私が宿題にした「しみこむ」「しみつく」「しみいる」の三つのうちの、どれが一番良い言葉かというのも、結局は「しみる」＋「こむ」、「しみる」＋「つく」、「しみる」＋「いる」という「言葉のたし算」であることも見えてきましたね。

「こむ」は「込む」です。「つく」は「付く」です。「いる」は「入る」です。それぞれの漢字は、どのような意味をもっているのでしょうかね。

そうそう、国語の授業の終わりに、私が黒板のところに行って、みなさんに音読をしてもらいましたね。

ほんの数分のうちに、みなさんの声が大きくなり、はっきりとした発音ができはじめ、俳句を読むのにふさわしいリズムで読むことができ始めました。

国語の勉強では、ゆっくり、はっきりと声に出して読みながら、意味を考えたり、覚えたりすることも重要です。もちろん漢字が書けたり、きれいな字が書けたり、ノートの使用方が上手だったりも大切です。

国語の勉強というのは、勉強のし方になれてくると、とてもおもしろくなります。これからも、ますますがんばってください。

授業の始め方や学習の準備の仕方には、その学級の「授業の実力」が現われます。

もちろん発表の仕方や聞き方、話し合い方、授業の進め方、意見として発表されるアイデアの中身にも、「学級の実力」はあらわれます。

6年2組の「授業の実力」は、なかなかのものでした。

学級のみinnで力を合わせて、「学級の実力」、「力こぶ」を、ますます大きくしていってください。

2学期には、かならず、また授業を見に行きます。

その日を楽しみにしています。

さようなら。

2006年7月8日（金曜） 8時25分 研究室にて 栞原昭徳（自筆サイン）

6. ベテラン教師、Y先生からの手紙

授業を参観して1週間のち、授業ビデオ、子どもたちの手紙と一緒に、授業者のY先生からも手紙が届いた。Y先生は、現在49歳、教育学部ご出身の教職経験23年目のベテラン教師である。そのベテラン教師が、この授業研究を機に、次のような手紙を届けてくださった。教職にある者が、生涯にわたって「研修」をし続けなくてはならないことを教えてくださる内容である。

また、手紙の中でY先生自身が「私にとって『授業』が生活の中心だった」と書いておられるように、志の高い教師ならではの研修に対する受け止め方と、覚悟のほどを読みとっ

ていただきたい。

◆ 本気で、真剣にがんばる

— はじめに —

私は、自分なりに「真剣にやってきたつもり」でした。

でも、数日前、自分のクラスでの授業を通して、「本当にそうだったのか？」と、自問自答してしまいました。

「これだけ、がんばったんだから、いいや」、「ほかの人はここまでしてないよね」、「私は、ここまで精一杯、もう限界」などと考えて、自分を甘やかしていたことに気がつきました。

今、とても反省しています。「日々の授業」こそ、もっと、もっと、がんばらないといけないと思いました。あきらめてはいけないと思いました。

— クラスへの思い —

私のクラスは、6年生です。飛び込みの6年生です。子どもたちは、話は聞くことはできるのですが、4月当初は、クラスのほとんどの子どもが話せない、声が出ない、壁のような雰囲気を持っていました。無表情、にこりもしない子どもがほとんどでした。子どもたちの感性も育っていませんでした。

それで、1学期間、私は、苦勞して何とか子どもたちから笑顔や声が少しずつでも出るようがんばりました。そして、やっと、最近、笑顔や声が出るようになってきたのです。友だちのことを助けられるようになってきました。

私は、「もう、これでいいだろう。多少、授業中の声が小さくても、以前に比べれば、おおきく進歩している。いちおう声も前まで届くようになってきたのだから」と、思っていました。

— 栗原先生の授業 —

2、3日前、山口大学の栗原教授が、私の授業を見に来てくださいました。その栗原先生は、素晴らしい授業ができます。荒れた学校を次々に建て直していく先生です。私たちの勉強サークルの顧問をボランティアでしてくださっています。

その栗原先生をお招きして、私が授業をすることになりました。

私は、同じサークルのベテランのK先生から事前指導をしてもらっていました。

「けっこう、子どもたちがのる、いい授業ができた」と思いました。声は小さかったのですが、子どもなりに一生懸命に発言をしていました。私は、「まあまあうまくいったかなあ」と思いました。

ところが、栗原先生は、授業が終わって子どもたちの前に出て言いました。

「声が小さい。もっと、君たちはがんばれば、声が出る。はい、その人、これを読んで」

※指名された女の子が読みました。その子にしては、上出来の声でした。

「だめだめ、もう一度。君は、本気で真剣にやっているのかね！」

※女の子、もう一度読む。声が少し大きくなっている。

「ううん、まだまだだけど、いいだろう。はい、今度は、全員で読んで！」

※全員で読む。声はかなり出ている。

「だめだめ、君たち、もっと、本気で、真剣に読んでみろ！ 読んでない子がいる！」

※全員で読む。声はかなり出るようになる。

「ううん、もう少しだ。もっと出るはずだ！」

というようにして、ミニ授業をされたのです。栗原先生の顔は、真剣そのものでした。真剣勝負という感じです。子どもの顔も真剣になりました。

私は、「さすが、栗原先生、すごい！・・・でも、子どもたち、大丈夫かなあ(厳しい授業だったから)」と、思いました。

そのあと、クラスの子どもにお礼の手紙を書かせました。

それは、喜びと感謝の内容でいっぱいでした。「声が出るようになった」、「また、きてください」、「今度は、もっと声が出るようになっていきます」と、書いていました。

私は、はっとしました。私は、「自分は、これだけやった。この子たちの能力なら、もうこれが限界だろう」と、思っていました。でも、子どもたちは、そうは思っていなかったのです。「もっと、伸びたい」と、思っていたのです。

私は、「ああ、しまった」と、そのとき思いました。「日々の日常で行う小さな営みを大切にしていなかったこと」に気づかされました。今まで、日々の仕事に忙殺されて、授業は経験と勘で乗り切ってきたところもありました。私にとって、「授業」が生活の中心だったのに、忙しさに追われて、中心がずれていたことに気づかされました。「子どもたちの可能性」を限定していました。

栗原先生の口癖は「本気で、真剣にやる」です。わたしは、「本気で、真剣にやっているつもり」でした。でも、その質と程度が、栗原先生とは、大きく違っていました。

私は、「栗原年生のように、日々の授業、日々の子どもたちの生活をもっと大切に、あきらめないで、もっと子どもを伸ばしてやろう」と思いました。

Y先生の、これからのますますの精進に期待したい。

また、Y先生の周囲に集う先生方の努力が報われ、生涯通用する授業指導力を、一日も早く修得していただきたいと、切に願う。

7. 6年2組の子どもたちからの手紙

6年2組の子どもたちからの手紙も、紹介しよう。

松尾芭蕉の授業のときは、大きな声を出すということと、しせい(姿勢)をていねいに教えてくださって、ありがとうございました。とてもよくわかりました。

「おしりを深く入れて(椅子にすわり)、(お腹と机の間に)こぶしが一つ入るくらいの間で、自分が思うしせいで」ということも教えてくださって、よくわかりました。

声を出すことも本気でということと、なにごと本気でやるということが、本気でわかりました。伝わってきました。

2学期も、どうぞよろしくお願いします。

(M・Y)

そのほかの子どもの手紙の一部分も、以下に紹介する。

- 「最後にしてくださった音読のおかげで大きな声が出せる、自信がもてました。」 F・Y
- 「先生に指導していただき、自信ができました。2学期にほめられるように、がんばろうと思います。」 H・K
- 「栞原先生のおかげで、声やしせいが、だいぶんよくなりました。」 S・T
- 「こんど会うときは、声がでかくなっていると思います。」 M・H
- 「栞原先生のおかげで、だいぶん声が出るようになりました。」 O・Y
- 「松尾芭蕉の俳句の勉強はどうでしたか。声は、小さかったけど、楽しい授業でした。勉強が終わったあとの「声の出し方」や「しせいの正し方」などを教えてくださってありがとうございました。」 O・Y
- 「栞原先生のおかげで、声が大きくなりました。2学期を楽しんでいます。」 M・Y
- 「私たちのクラスは英語の勉強のときは時々しゃべらないときがあったので、自分だけとはずかしかったけど、他の人たちも少しだけ声が出るようになったから、はずかしくなくなりました。よかったです。また、2学期には来てください。」 K・S
- 「6日の日は、授業を見ていただいて、ありがとうございました。(これからは)気付いたことを言うようにします。授業も、最後まで見ていただいて、アドバイスまでしてもらって、うれしかったです。2学期は、しせい正しく、声もはっきり出します。2学期を楽しみにしててください。ありがとうございました。」 U・N
- 「研究授業をしに来てくださり、ありがとうございました。先生のおかげで、俳句の読み方が分かりました。また2学期も着てくださいね。」 T・A
- 「俳句を読む声も、はじめは小さかったけど、栞原先生のおかげで声が出るようになりました。本当にありがとうございました。また2学期に待っています。」 S・A

私も手伝い、身に授業の中でも取り上げた掃除については、次の3人が手紙の中で触れていた。

- 「そうじのことをほめてもらって、とてもうれしかったです。」 S・M
- 「そうじを手伝っていただき、ありがとうございます。」 O・Y
- 「そうじ時間のとき、話をかけてもらい、とてもうれしかったです。」 M・Y

初めて出会うことになった6年生たちであったが、Y先生のご配慮により、お互いがこれからも出会いたくなるような気持ちになれた。それも、「2学期にはがんばりたい」という、前向きな方向で。

このようにクラスの子どもの中に、外部の参観者を意識しながら平素の授業に取り組み、「学級の実力」「授業の実力」を高めていこうとするような風潮が生まれると、子どもたちの授業に対する気持ちは高まり、学習活動が飛躍的に進展する。

A小学校の6年生と、ふたたび出会うことができ、授業について語り合うことができることを今から期待をしている。

8. 謝辞

Y先生は北部九州で私も参加している授業研究会の事務局長でもある。この勉強会では、たくさんの現場教師たちが自らの授業指導力を高めることを目指して集まり、日常的に活

動している。

若い教師たちが、実践論文を書いたり、実践に行き詰まったとき、Y先生を頼りにしている姿を、私も何度も目撃した。山口大学の私の研究室の学部生や大学院生も、この勉強会にはお世話になっているし、Y先生はじめ会員の前向きの教職生活に刺激を受けている現場人は多い。

現場教師の「授業指導力」を高めるのは、公的な学校の研修だけではなくて、教師自身の手による自主サークルの場こそが、本物の実践力を身につける場のように思えてならない。Y先生につづく授業実践人が、多く出ることを期待するものである。いや、困難かもしれないが、いずれはY先生を乗り越えていく実践人が生まれることを期待しているのである。

そのような期待をしてよいという予感を抱かせるY先生の重い重い「手紙」ではあった。難しい専門用語が使っているわけではない。それどころか反対に、日常の平易な言葉を使って、Y先生の正直な気持ちが吐露されているところに、この手紙の説得力が済んでいると思われる。

この手紙の文面に接した実践人に対して、教師の研修とはいかにあるべきかを深く考えさせる実質を持っている内容であった。新しく担任することになった学級の子どもの事実に向き合い、あえて勇気を出して授業を公開し、手紙まで書いてくださったY先生に心からの感謝をしたい。

私自身、1学期後半の忙しい生活の中で、あえてこの論文を書きあげようとした原動力は、じつにY先生の、この「手紙」であったことをここに告白しておこう。

Y先生をはじめ現場の先生方を中心に運営されている研修サークルが、この8月19日～20日の3日間、阿蘇合宿と称して集中的な勉強会を開催する。私も、ゼミの学部生や院生とともに出席する予定である。その目的はただ一つ、学生たちの「教職の夢」を実現するためであり、現場の先生方の「生涯通用する授業指導力」を修得するためである。